

大阪の地形と地下鉄

写真は大阪市立中央図書館にある大阪「2万5千分1デジタル標高地形図」。前にも見たことがあり、レポートで紹介した。大阪に暮らすようになり、災害が「わがこと」として気になり再び手にした。大きくて重い地形図だが、図書館の研究個室に持ち込んでじっくり見て、写真におさめた。

真中下、斜めに流れる大河は淀川。その上に淀川に沿って流れているのが神崎川。真中すこし右で上に突き出ているあたりが、自宅のある淀川区東三国である。低い標高を示すブルーの色を見ていると、なんだかブルブルしてくる。

標高地形図の下右側の黄色が上町台地だ。先端には大阪城、寺院などが立ち並んでいる。大阪の歴史を象徴する地域である。大阪城の位置を見ていると、名古屋城から熱田神宮に至る熱田台地を思い出す。大阪は名古屋と同様に、市の北西部に低地が続いている。異なるのは上町台地の東側もブルーの表示であることだ。大阪の災害脆弱性を考えるうえで、東部にも低地が続いていることに注目しておきたい。

写真下は『地図中心』2018年1月の特集「日本の地下鉄地図帳」から。大阪市立中央図書館で初めて手にした雑誌であるが、標高図に地下鉄路線が掲載されていた。東京や名古屋と比べても、大阪の地下鉄が低地を走っていることが、この地図からもよく分かる。大阪市営地下鉄は開業順に、御堂筋線、四つ橋線、中央線、谷町線、千日前線、堺筋線、長堀鶴見緑地線、今里筋線の8路線である。

2月3日の大阪市営交通の会シンポジウムで、交通局OBの方から、「地下鉄の津波防災対策の実態調査」についての報告があった。大阪市営地下鉄は8路線がつながっており、9割が地下を通っている。よく利用する御堂筋線の江坂から中津の手前までと、大阪港へ向かう中央線の一部が高架。地下鉄の駅は123駅であり、地下が115駅である。

南海トラフ地震で発生する巨大津波は、2時間後に大阪湾に到達し市域を襲うという。大阪市内は津波、淀川や大和川の氾濫水、液状化で噴出する地下水などで大きな被害が想定されている。地下鉄の津波防災対策を強化するために、OBの皆さんらが止水設備の調査をされていることを知った。大阪市はもっと防災対策に全力をあげるべきだ。

(2018年2月6日)

